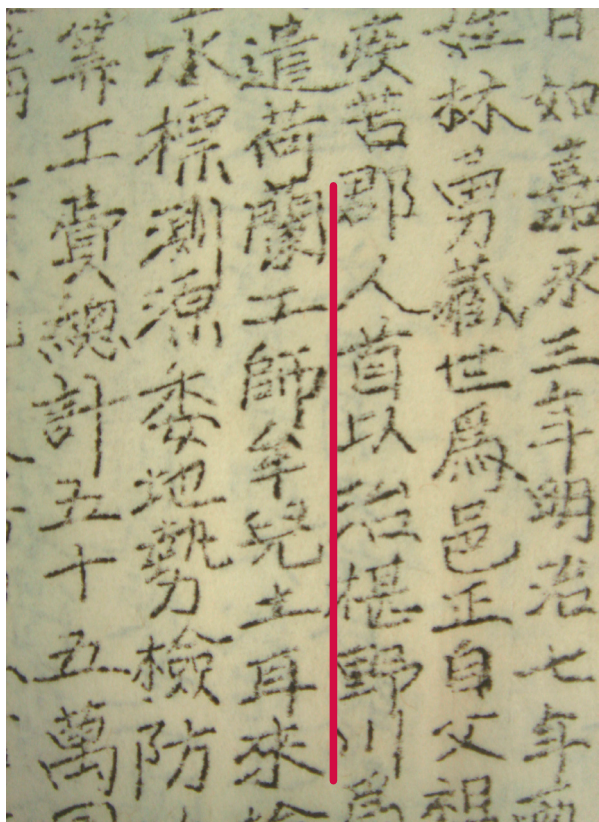


お雇い外国人「ムルドル」



＊富田家文書3「榎野川修工記」（部分）榎野川修工記念碑の碑文を写しとったものです。

解説

「お雇い外国人」とは、近代国家の形成を急ぐ日本が、近代的な制度や技術を学ぶために、欧米諸国から招き入れた外国人指導者のことです。

県央部の吉敷郡を貫流する榎野川は、長雨になると毎年のように堤防が決壊して、流域の民家や田畑に大きな被害をもたらす「暴れ川」でした。

明治期になり、地元の有力者（林勇蔵・吉富簡一・本間源三郎ら）で組織された「榎野川改修聯合会」の嘆願をきっかけに、内務省による榎野川の治水工事が実施されることになりました。

1880（明治13）年に現地を実見して、工事の青写真を描いたのが、内務省土木局の御雇治水工師であったオランダ人ムルドル（ムルデル）です。当時、国内各地の砂防工事や河川・港湾整備にはオランダ人技術者集団がその手腕を発揮していたのです。

海外留学で洋式土木技術を学んだ内務省技師の田辺義三郎（長州出身）らの指導のもと、1884年に着手された、砂防工事・川幅拡張・護岸工事・導流堤（支川の合水流を矯正する施設）設置などの治水工事が竣工したのは1896年のことでした。

ムルドルの名は、河川改修工事のあしどりを記した榎野川修工記念碑に「牟児土耳」と刻まれています。県内では、1889年に下関の港湾整備の指導にもあたっています。



＊関連する資料として、県庁戦前A総務1486「榎野川改修聯合会決議書」、県史編纂所史料466「榎野川記 林勇蔵存之（写）」、行政資料30内務3「匡救土木事業榎野川改良工事誌 第1輯」などがあります。写真左は榎野川修工記念碑です。